

# 盆栽の図像学

浮世絵にみる江戸・明治の盆栽

## 第一回

鳥居清長 《風俗東之錦 植木売り》

解説／田口文哉



鳥居清長《風俗東之錦（ふうぞくあずまのにしき） 植木売り》  
大判錦絵 38.5×25.1cm 天明3～4年（1783～84）頃 版元印なし 個人蔵

浮世絵師紹介 鳥居清長 宝暦2～文化12年（1752～1815）  
江戸日本橋の本屋、白子屋市兵衛の子として生まれた。浮世絵師の一派である鳥居派三代目の初代鳥居清満に入門し、師の没後四代目を襲名した。天明期（1781～88）を中心に、大判と呼ばれる従来より大型の紙を用い、スタイルのよい女性の全身肖像や群像を多数制作。これが人気を博し、美人画の典型となった。また、大判の紙を2枚、3枚とつなげてワイドな大画面として用いる続絵（つづきえ）によって、その後の浮世絵の可能性に新たな展開をもたらした絵師である。

### 浮世絵にあらわされた鉢植・盆栽

江戸時代に、おもに江戸の町人の文化、つまり「浮世」の風俗を題材にした版画が大流行した。浮世絵版画である。明和期（1764）以降には、色版を多数用いて摺り上げた彩色豊かな「錦絵」と呼ばれる多色木版が売り出され、階層の上下を問わず好まれた。

この浮世絵に、江戸以降の町人たちが親しんだ鉢植・盆栽が驚くほど数多く描きこまれていることは、案外に知られていない。特に、右に挙げた鳥居清長や喜多川歌麿ら現代においてもっとも著名な浮世絵師らが活躍する天明・寛政期（18世紀末）頃から幕末・明治期を中心として、美人画や役者絵、風俗画等々の画面内に、時には片隅にひっそりと、時には絵の主要として大胆に、鉢植・盆栽があらわされているのである。

### 本連載のねらい

今号より始まるこの小連載は、こういった江戸期以降、明治時代まで制作され続けた浮世絵版画を毎号一点ないし二点ずつ取り上げ、絵の中にあらわされた鉢植・盆栽に注目して紹介するものである。

そして本連載では特に、絵を一見しただけでは見過ごしてしまいがちな、浮世絵世界の語るところに目を向けてみたい。描かれた人間を含め絵にあらわされたモノ、すなわち「図像」は、何をあらわし、どのような意味をもっているか。そしてモノは絵の中でどのような働きを独自に担っているのか。本連載のねらいは、それを浮世絵版画を対象に読み込むこと、さらにつつこんで言えば、絵の中にあらわされた盆栽を含めた図像のメッセージを読みとることである。そのねらいから、この連載の題名が生まれた。名付けて「盆栽（はちうえ）の図像学」である。

### 一枚目の作品

第一回に取り上げる作品は、天明期（1781）以降、浮世絵に美人画の新たな潮流を生み出した浮世絵師、鳥居清長による《風俗東之錦 植木売り》である。「風俗東之錦」とは、その名のとおりに「東」すなわち江戸の風俗を題材にしたもので、女性たちを主人公とした全20図のシリーズからなり、本作はそのうちの一点にあたる。

まず絵を見てみよう。絵の中心部には、「台輪（だいわ）」と呼ばれる竹組で吊るす運搬具の板上に、大小含めて5点の鉢植・盆栽が置かれている。手前には小型の鉢と石台（せきだい）と呼ばれる木製の容器に植えられた福寿草が3点置かれ、左奥には松と福寿草が寄せ植えにされた鉢が1点、中央奥には花が咲いた梅の大きな盆栽が1点置かれている。その種類から、季節は正月であることがわかる。絵に占める割合としては、ごく小さいながらも、特筆すべきは、植物の生き生きとした様子が伝わってくるような、

鉢も含めた丁寧な描きこみである。

どうやらこれらの鉢植は、右側に屈んでいる手ぬぐいを被った青年が担いで売りにやってきた商品のようなのである。青年の腰の向こうには店番のために腰掛けていた台が見え隠れしている。そして盆栽をはさんだ左側には、その盆栽に興味を示して足を止めた、すらりとしたプロポーションの二人の女性の立ち姿。彼女らの後ろにはお付きの少年がおり、おそらく裕福な家庭の母子かと思われる。顔を近づけて左手を指差そうとしている女性は、留袖を着たおかみさん。対して奥の女性は振袖を着た娘さんで、そのやりとりをちよつとすまして遠めに見やっているのである。

### 絵の見せ場

絵の内容は、江戸市中に立つ植木売りのもとに通りかかった親子連れが足を止めた、日常のひとコマを切り取ったような場面だと一応は理解することができる。ただし、この美人母子とまだ若い植木売りの、視線を合わせるようにで合わせていない、読者になにか期待をもたせるような親密な緊張関係は、どう理解してよいのだろうか。この絵ならではの場面の見せ方に、改めて注意する必要があるのではないだろうか。この絵の重要な点、それは、美人母子と植木売りの美男子の取り合わせ——日常生活の光景のなかに埋め込まれたこの取り合わせこそが、この絵の最大の見せ場になっていることである。

### 隠された男と女のドラマ

事実、江戸の植木屋は、当時最大の娯楽だった歌舞伎の主要配役ともなる、粋な男の代表格であったことに注意する必要がある。そのような男と裕福な美人母子のやりとりは、世間が憧れる「絵」ならではの取り合わせだ。そういった市中の人々の憧れを敏感に察知し、日常につながる題材として絵画化したことこそが、この絵の魅力だと言えるのである。

この絵は、江戸市中の憧れの存在でもあった植木屋を若い美男子に見立て、それを取り巻く美しい母と娘それぞれの微妙なやりとりの相違を、画面上にみごとに構造化してあらわしている。言ってみれば微妙な三角関係の世界、秘められた男と女の繊細なドラマが、盆栽を買い求める日常の光景を借りてあらわされているのである。そしてここでは、描かれた盆栽が物語の発端をなす格好の小道具となっていることを忘れてはならない。この一図は、そういったメッセー지를、見るものに向けて物語っている。

そしてこの絵の読み方について付け加えれば、男女の三角関係の世界の親密さをより確かなものにする働きを、一人そっぽを向いた少年のそぶりが担っていることにも、最後に注意をはらっておきたい。（続）

さいたま市大宮盆栽美術館のイベント告知

■「美術コレクション展Ⅲ 福づくし—新春を祝う浮世絵と盆器—」  
概要：年末から年始にかけて新春を祝う時期に合わせ、当館所蔵の浮世絵と盆器の中から、松竹梅をはじめとした吉祥文様があらわされた作品を展示します。  
会期：平成22年12月11日(土)～23年1月12日(水)  
(毎週木曜日、12月29日(水)～1月3日(月)は休館日)  
関連事業：美術コレクション展ギャラリートーク 12月12日(日) 13:30～  
■埼玉県さいたま市北区土呂町2-24-3 ☎048-780-2091

著者プロフィール  
田口文哉（たぐち・ふみや）  
さいたま市大宮盆栽美術館学芸員。  
1977年生まれ。2009年、日本大学大学院芸術学研究所博士後期課程修了 芸術学博士。勤務先である大宮盆栽美術館では絵画部門を担当。四季のうつろいにあわせ、盆栽があらわされた浮世絵を展示している。